

島の問題 提起するために

11月のアンケートに協力を

傷みの激しい高濃度地区の家屋



ふるさとネットは11月に高濃度地区と在京者向けのアンケートを行う。これまで2回のアンケートは、都や村、マスコミに島の問題を伝える役割を果たした。高濃度地区の帰宅者が少なかったり、孤独死が新たに発生したりする中、状況改善のためにご協力をお願いします。

三宅島新報

発行所：三宅島ふるさと再生ネットワーク
 〒100-1101
 東京都三宅島三宅村神着 320-2
 Tel. 090-4922-0798
 発行人：会長 佐藤就之

福祉まつり 20日に 社協 参加を呼びかけ



社協が主催する東北の被災地に送るすり身作り
 三宅島社協は、11月20日に第9回福祉まつりを開催する。

今回のテーマは、「住民活動が作る地域の力」で、多数の参加を呼びかけている。会場は三宅村コミュニティセンター（伊ヶ谷）で、9時30分から17時30分まで。恒例のフリーマーケットの他、各種イベント、講演会、展示（3日から19日までは郷土資料館ホールで展示）など。楽しい一日とする為に協力をしよう。

帰島後のコミュニティは、様変わりした。10月には神着地区で、帰島後4人目と思われる一人住まい男性の孤独死があった。課題となっている人工透析を受けていた77歳の男性も帰島叶わず6月に死去した。

ふるさとネットによるアンケート調査は、第1回目を全島避難解除後の2005年11月、第2回目は07年12月に実施しており、今回

で3回目となる。1回目から、大妻女子大学大学院人間文化研究科・人間関係学部の干川剛史（ほしかわつよし）教授の協力をいただき、三宅島噴火・火山ガス災害に対する被災者・島民の立場から集計結果をまとめて、都、都、国に要望書として提出して改善を求めてきた。また都庁記者クラブで

記者会見を行った結果、三宅島の噴火災害被災者の現状が広く報道されたという経緯もある。

福島の避難者救済のためにも
 今回の調査は、東日本大震災とりわけ福島原発事故の被災者救済にも関連する。長期災害の適切な救済の必要性を示す一端ともなる。

現在、坪田高濃度地区在住のAさんによると、帰宅者は、三池集落10世帯、沖ヶ平集落10世帯計20世帯に留まる。避難解除直後には、少なくともこのほかに30世帯の帰宅希望者がいたが家屋の修繕費、病氣・高齢化、他地区移住、在京者となり諦めた。「行政の責任は重い」と言っている。諦めない！支え合い！ご協力をお願いします。

事務局便り

○第26回世話人会開催

1月7日（土）
 18時30分～
 巣鴨ルノール会議室

○投稿募集

投稿は事務局の投稿係まで。500字程度で、手紙・FAXをお願いします。氏名、年齢、住所、電話番号を明記してください。

○ご寄付のお願い！

郵便振替口座
 口座番号：00120-3-545036
 口座名称：三宅島ふるさと再生ネットワーク

【三宅島ふるさとネット事務局】

郵便番号：173-0005
 住所：板橋区仲宿 25-6
 電話：03(3963)5678
 FAX：03(3963)5697
 担当：大石・加藤

会長時評

噴火災害検証② 引き続き全島避難まで

なかった「安全」の実感

前々号から始めた「噴火災害検証」の2回目を掲載する。今回のテーマも全島避難まで。検証を進める中で、8月29日に出された安全宣言に関して、疑問の声があったり、火山ガスの情報がきちんと伝えられていない状況があったことがわかった。

加えられた「嚴重注意」

本紙7月1日発行(第34号)の「噴火災害検証」全島避難までの続き②を始めた。

①では専門家と都、村の災害対策の混乱に触れた。三宅島現地対策本部の指揮を行った当時の青山副知事も退任直後に「石原都政副知事ノート」



灰の棧橋 涙 別れ

残る観全部が心配

私たちの生命は…

責任をなすりつけ合う専門家と行政に島民の怒りが爆発 (朝日新聞 8月30日朝刊)

平凡社新書・740円を2004年1月に発行している。その中の「三宅島のマグマはどこにいるんだ」の項には、9月1日の全島避難指示直前の「8月の29日午後7時、火山噴火予知連から『安全宣言』が出され、村は、直ちに避難勧告を全面的に解除した。現地本部では『安全』という実感がなく、避難解除に疑問もだされた」という内容が書かれている。最初から現地にきていた

脆弱だった噴火予知の基礎

この他に、火山予知連絡会の会長井田喜明東大名誉教授(当時)等の共著で「火山の辞典第2版・朝倉書店・2万3千円・08年6月発行」と前地震予知連絡会会長茂木清夫東大名誉教授の「地震のはなし第2版・朝倉書店・2千900円・02年8月発行」が注目される。

井田会長は、「三宅島では、初期の山腹噴火が予知できたものの、爆発性の強い山頂噴火の展開は予測能力を超え、住民の避難もやや後手にまわった。これらの事例は、現在の噴火予知の能力、限界、問題点を具体的に

示している」さらに「三宅島では約2千500年ぶりのできごとである。このような現象に対処するには、噴火予知の基礎はあまりにも脆弱であった」(P391)と告白している。

一方、茂木教授は、初版は噴火直後の01年10月であるが冒頭に「三宅島の噴火と巨大群発地震」の項で詳しく図解入りでしくみを明らかにしている。そのP4で火山噴火予知連と地震予知連が伊豆では両予知連が「連携して事に当たるために会

長間で覚え書きをかわしていたのに今回役立ったこととは残念である」と専門機関(家)間の連携がなかったことを指摘し、三宅島噴火の予知の混乱の原因を上げた。著書では、噴火の推移と原因をわかりやすく具体的に説明している。(ぜひ一読を薦めたい)

新聞テレビの報道も…

新聞・テレビは、どうだったか。新聞は図書館等で縮刷

版に眼を通してみた。気象庁は8月18日に二酸化硫黄放出を確認した。しかし、それ以降も噴煙8km、地震、泥流や火砕流発生など大きく占め、8月29日に掲載された、「二酸化硫黄濃度上がる―東京など―」(朝日新聞夕刊)はベタ一段。その他の一般紙も大差はなかった。

インターネットのホームページなどに掲載された「テレビ報道にみる三宅島2000年噴火危機」群馬大学早川由紀夫助教授や、「2000年8月の三宅島に関する火山活動評価・情報伝達上の問題点」静岡大学小山真人先生など見ても同様である。

ところが、私たち高齢化した被災者は、パソコンを持っていないケースも多い。目が届かないインターネット上では、各地の大学教授などの専門家が、火山噴火予知連と行政に厳しい批判と提言を繰り返していた。それについては、次号に譲りたい。(佐藤就之)

一橋大 猪飼周平先生が現状分析 住民行政一体の自治を

9月に学生16人と共に来島し、島の医療、コミュニケーション、産業に関する調査を行った一橋大学大学院准教授の猪飼周平先生に、島の状況を分析していただいた。先生は、住民と行政が一体となって実質のある自治を実現することの大切さ、それを大人たちが責任を持って実現することの大切さを訴えた。

「三宅村を三宅町に」

9月4日から8日までの日程で、ゼミ学生16名とともに三宅島を訪問させていただいた。島内各



来島した一橋大学猪飼ゼミのメンバー（坪田の常磐クラブにて）

所を訪問し、三宅島での生活、産業、医療、教育、東日本大震災への教訓など実に多くのことを学ばせていただいた。私たちが訪問を温かく迎えて下

さった島民の皆さんに心より御礼申し上げます。東京に戻る船中、一人の三宅高校の男子生徒と話す機会があった。彼が将来自分の力で「三宅村を三宅町にしたい」と意気込みを語ったことに、三宅島の明るい未来を見た思いであった。だが、その一方で、その少年の夢を叶えるためにも、島の大人たちには大きな仕事が残されているとも感じた。

一人ひとりの健康把握を

三宅島で現実のものとなつている超高齢社会への対応を例に考えてみよう。超高齢社会において重要なことは、自宅で健康やかに老いることができること、そのための地域ケアを、住民と行政が一

猪飼先生プロフィール



一橋大学大学院社会学部研究科准教授。1971年生れ。東京大学経済学部卒。2001年佐賀大学経済学部専任講師。02年同助教授。07年より現職。専門は、医療政策・社会政策。

体となつて実現することである。これについて三宅島の現状はどうか。まず行政からみると、保健師、診療所、社協の間の情報共有や協力関係が十分であるとはいえないようである。特に島民一人ひとりの健康状態についての情報が十分行政に把握されていないことは、島民の健康に大きな影響を及ぼすと考えなければならぬ。

1983年噴火当時阿古診療所に勤務していた箕輪良行医師が「診療所から持ち出した器具は役に立たなかったが、阿古の住民1300人の健康状態をほぼ完全に把握していたことは大変役立つ」と述べたように、地域ケアの要は住民の健康情報なのである。

残された相互不信

ではなぜ、住民の健康情報は行政に十分伝わらないのだろうか。私が各所で話を聞く中で感じたのは、究極的には住民と行政の距離が遠い点に理由があるのではないかと

いうことである。そして、その大きな原因が、2000年噴火に際しての全島避難にあるということである。つまり、三宅島では、噴火の爪痕が住民と行政の相互不信として残っており、それが島の高齢化対策に悪影響を与えているということなのである。

島の夢 共有の地ならしを

おそらく住民と行政の溝は、他の多くの行政サービスにも同様の影響を与えているのであろうと推察できる。とするならば、三宅島の復興の要とは、住民と行政が一体となつて、実質のある自治を実現することであるといえるのではないだろうか。

少年の語つた「三宅町」は、決して不可能な夢ではない。だが、そのためには、住民と行政が島の夢を共有できるような地ならしが必要である。私は、それを三宅島の大人たちが、大人の責任として実現して頂ければと考えている。

あおぞらフェスタで特産品販売

状況知ってもらおう機会に



神楽坂商店街に出店した物産店

ふるさとネットは、神楽坂商店街で10月2日の12時から行われたあおぞらフェスタに、三宅島の物産店を出店。明日葉やくさやに加え、初めてつみれ汁、山菜おこわなどを販売した。また、今回は揭示物にも力をいれたことで、島の現状などを、多くの人に知ってもらおう機会にもなったようだ。

あおぞらフェスタは年2回の神楽坂商店街が企画しているイベントであったが、5月は東日本大震災の影響でイベント自体が中止となつてしまった。そのため、今回を待ちわびていた人もいて、会場は、例年以上に

多くの人で賑わった。ふるさとネットでは明日葉、里芋、イモ餅、ヨモギ餅、くさやのほか、三宅島のタケノコ等を使った山菜おこわ、ささぎを使った赤飯などを販売。また実演販売では明日葉のてんぷらのほか、

初の試みとして島のムロアジを

【お便り】

皆様お元気でお過しの事と思います。この所も暗いニュースが起っていますね。なんとか乗り気ってほしいと祈るばかりです。三宅島も頑張っています。

いつも三宅島新報楽しみにしています。シルバー人材センターからの配布で読んでいます。長い間本当に有難うございました。涼しくなりますので、くれぐれもお体を大切にしてください。(S様)

【ご寄付者名】

佐藤宗ノ子様 吉岡薫様
M様 大島循子様
吉田信行様 中島修平様
笹井美奈子様

【震災義援金ご寄付者名】

鈴木節子様
(8月1日～9月30日)

使ったつみれ汁も用意した。売れ行きは好調で、終了時間の18時には、ほぼすべての商品を売り切ることができた。

問題は、商品を購入してもらった人も、三宅島新報を配布したほか、DTPAも協力して作成した噴火から現在までの流れや現在島で起きている問題、そのほか島の特産品

を紹介した模造紙の展示も行った。道行く人々がこのような展示に目を止める姿も多く見られた。東日本大震災に世間の目がいくなかで、噴火災害の爪痕が三宅島には未だに残っていることを伝えることができたようだ。

10月19日にネット世話人会

訪問活動など議題に

第25回三宅島ふるさと再生ネットワーク世話人会が、10月19日の18時30分から巢鴨のルノール会議室で行われた。

この日の議題は、あおぞらフェスタの報告、高濃度地区住民と在京者に対するアンケート(1面に記事)の実施方法、在京者への訪問活動の状況と今後の方針など。アンケートに関し



巢鴨で行われた世話人会

ては結果を次の紙に掲載すること、訪問活動に関しては、アンケートの呼びかけも含め、ふれあいコール(電話)を通じて要望を確認し、訪問先を検討することなどが話し合われた。

編集後記

私たちもネットの皆さんとともにあおぞらフェスタで特産品の販売をしました。例年以上に多くのものが売れ、島の状況を知っていたら機会にもなつたと思います。模造紙づくりを担当しましたが、これからも広報活動に力を注いでいきたいと思えます。(DTPA一同)